

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成17年  
- 月号

毎月23日発行  
通巻424号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成17年12月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷 株式会社  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



① 豊受大神社  
② 皇大神社にて  
③ 同上、目室岳(一願さん)

10月30日 秋の一泊文化行事 齋藤正宏さん撮影(本文・5頁)

平成4年12月23日

## 何のためにこの世に生まれてきたのか

日聖祭法話より

法主 矢追 日聖

### 八十一歳を迎えて

皆さん、おはようございます。去年の今日は、うちの家内が入院中で、私一人で話をさせてもらったんですが、八十歳という人生の大きな峠を越えて、それからまた一年間長生きさせて頂きました。

今日は朝からお湿りを頂いて、まあこんな行事の時はお天気であればいいような気がしますが、これは天の心でございませぬ。お天気でもありがたい、雨でもありがたい。お湿りがあれば芽吹く、芽出たいというふうになっておりますしね。

一年間、健康で生きさせてもらって非常にありがたいと思っておりますが、人間の肉体というものは、どれだけ努力しても、あるいは神さん仏さんのご加護があつたとしても、自然の摂理によつて一年、一年、老化していきます。

私も、昭和五十五年に脳血栓になつてみたり、昭和五十八年には白内障で両眼の水晶体を抜いてもらつておりますが、眼鏡という結構なものがありますので見るのに不自由はございません。

それから約十年経つて昨年の十一月十三日から十二月五日まで病院の中に居りました。考えてみますと、達者でおる間は休むということがないので、ちょうど静養でございました。これも神さんのお陰だと喜んでおるんです。普通はまあ、入院となると皆さんにご心配をかけることになるんですけれども、私の場合は皮膚でございますので、命に別状ないんで

一カ月近く病院で静養させてもらいました。

世間の宗教人には色々、修行をする人が多いですが、私は行したり願かけしたり、水を被ったり断食したり、自分の肉体を痛めるような修行をしたことがないんです。私は生まれてから今日まで、それは何にもしたことないんやけれども、訳の分からんものが分かってくるような、精神分裂みたいなところも半面あるんです。

ところが予期せず、二週間程は十字架にひっつかかったみたいに手も足も身体を動かすことが出来ない。小便も取ってもらって朝から晩まで、子供みたいにじーっと寝かされておる。生まれて初めての、つらい行やなと思いました。

けれどもね、こんな簡単なことで、時間が経てば肉体というものはだんだん回復していくように、自然の摂理は出来ておるんやからね。じきに楽になってきまして、今日の日に健康状態に復するよう逆算したように、ちょうど良い時から病院の方で静養させてもらったんです。私の肉体に持っている、八十年間の心の垢を流してもらったつもりもしますしね。こんなことは、まあ人格神の計らいやと思います。

私も横着してね、痛いことも痒いこともないし、ちよつとジユクジユクとするだけやし十年間も放ってまして。最近、ちよつと症状が動き出したので、皮膚科の先生に診てもらったらペーチエツト病で、薬を塗っても治らへん、その部分を取ってしまわなアカン、それでまた、そこに背中の皮を取って貼るという手術をしたんです。ペーチエツト病は放っておいたらガンになるらしい。

お陰さんで、今日、こうして皆さんの前で話もできます。八十年使っている肉体ですから、どこかに故障があると思うんやけれども、色々検査してもらったら、今、これといって欠点がないらしい。

いんです。仮に今からガンと言われても、死ぬまでまだ間があるやろとのんびり考えておったんですが、今のところガンもないらしいんです。そういうようなことで入院しましたが、入院と聞けば人間というのはええように考えませんし、

「法主さん、悪いんやな。死なはるんかなあ」と心配してくれた方もあつたかもしれません。八十一歳にもなれば、まあまあ先は短いとは思いますが、簡単にはお迎えが来ませんので、もうちよつとこの世で仕事が残っておるのやろと思います。

## 地縁と、血縁と

私がかこまで命を長らえたということについて、今朝も考えてみたんです。八十一年の人生を振り返つた時に、自分は何がために、この世に生まれてきたのか。その結論は出ております。この年になって、初めて分かつたというようなことでございましてね。

大倭神宮のある場所は、日本の歴史上、国賊第一号の長髓彦の邑ということになっております。しかし、日本の大きな流れの中から見て、一番肝心な霊地なんですよ。けれどもこれが、全然、世の中に知られていない。先ずこれを顕すのが、私の大きな使命の一つなんです。

私は大倭神宮の所で生まれております。これが土地の縁。それから矢追家という血の筋。この地縁と血縁において、私が明治四十四年に生まれたというのが一つの宿命、因縁なんです。

それで何を言うべきか、細かいことまでは分からんけれどもね。大きな流れから言いますと、大倭神宮は、奇稲田姫命さんの本地(※本国)です。これは人格神です。

神さんには人格神と自然神の二種類がありま

す。人格神は、肉体を持つてこの世に生まれてきた我々の先祖なんです。昔の、いわゆる偉い人で、人間の霊なんです。自然神とは区別しておいてほしいんです。

大倭神宮は、奇稲田姫命という我々の大きな先祖さんの終焉の地なんです。その生誕の地は、三輪の出雲で、その豪族の足名稚、手名稚を父母として生まれた八番目のお姫さんですね。

八岐大蛇の伝説で有名です。これは吉野とかあの辺りのあちこちにおる豪族のことだと思いが、七人目のお姫さんまで食われたというのは、略奪結婚ですね。昔は、そういう習俗があつたと思ひます。最後に一人残つた奇稲田姫命は、今度自分の番だということを恐れて、自分の先祖のおやまとである大倭に逃げて来られたんです。そして今現在、大倭神宮のあるあの場所で一生活らして、そこで亡くなつておられるんです。

それから、奇稲田姫命さんご主人になつたのが須佐之緒命さんです。ところが後の世には、それがゴチャゴチャになつて分からんようになってしまった。しかし、私はあの霊地で生まれて、その霊気を受けているので特に分かることがあるんです。

日本の古代史の中で一際有名な神さんが——人格神ですが——饒速日命なんです。天の磐船に乗つて、河内の国の山に天降つて、そこからこちらへ飛んで来て生駒に下りて、登美に移つて来たというような伝説があります。ところが、この伝説はですね、霊界物語なんですよ。

だから私が霊界を見ておりますと、奇稲田姫命さんと須佐之緒命さんの間に生まれてきたのが、饒速日命さんなんです。昔は霊界の見える人がたくさん居りましたからね、受胎するまでの霊界物語なんです。奇稲田姫命さんのお腹に宿つた神さ

んが、饒速日命さんです。

饒速日命は、非常に立派な神さんで、昔の人達は色々な呼び名を付けてます。大国主命、大己貴命とか、結局それは饒速日命と同一人物なんです。ですから私が、どちらの名前で呼んでも同じ神さんが出て来られます。皆、同じ人格神の別名なんですけれども、日本の歴史の流れの中で誤りがあるんですね。

また長曾根というのが、その土地の名前です。だから饒速日命（大国主命）さんは長曾根の大君なんです。

## 歴史の誤り

そんな時代と、神武天皇がヤマトへ出て来て政権を取った時代とは、かなり長い年代が隔たっております。しかし、後の人はだんだん年代を忘れるし、古い人も新しい人もどの人も長曾根の大君あるいは長曾根日子という一つの名称で残っていますから、誤ってくるんですね。

現在の日本の歴史の中では、長髓彦と言って、神武天皇に刃向かった国賊のようになっています。戦争中であれば、私が壇上で長曾根日子の話をする時、「弁士注意！」と言われたんですよ。

歴史がどう言おうと、それは絶対に間違っているということ、世の中にはつきりと言わなければいけない。それが、私の使命の一つです。

それと同時に、日本の宗教があまりにも企業化しすぎているから、純粋な宗教に戻さなければなりません。それが、もう一つの使命です。

その二つの大きな使命を達成するために、私個人の人矢追家、私の肉体に対する色々な動きが付いてまわります。大倭紫陽花邑とか、枝葉のものが皆、出てきましたし、自分で考えてみれば、今

この年で、この世に生まれてきた私の役目は、全部一応格好がついておるんです。

ついてはおるんやけれども、命のある間は、今日までで自分が経験したことを、だんだんと抜く皆にしゃべらなければいけないんです。

けれども私が話をする古代史は、歴史の研究者からは気持ちがいいみているでしょう。今言うように、奇稲田姫命さんと須佐之緒命さんの子供さんで饒速日命で、饒速日命は大国主命とも大己貴命とも、また長曾根の大君とも言う、そんなこと言うたら気持ちが扱いされますよ。

それは分かっていますが、私が霊界を見るとうなっているんです。

長曾根の大君が、何千年か何百年か知らんけれども代々続いて、近畿地方を中心として全国を統治していた大きな勢力だったんですね。そこへ、九州から出て来た神武天皇の勢力と政権を交代した形になったんです。

しかし結局、あちこちへ出て行く長曾根一族もたくさんあって、全国に散らばって行った。その時に皆、大倭の神さんを提げて行くでしょ。須佐之緒命や饒速日命を、自分達のご先祖としてお祀りしたんです。今も全国の神社のご祭神を見れば、須佐之緒命や饒速日命が多いんです。

そういう意味のことが、現在、日本の歴史の中で全部、抹殺されているんです。長曾根の大君は、長髓彦という国賊ということになっている。そんなふうでは、人格神ですから、やはり腹も立つんです。

## 何故、宗教なのか

今は結構な時代になりました、世間にももつと気持ちがいい話を言っている人もたくさんお

ます。しかし、私の場合は、説や理論とかそんなものではない、現実なんです。それを、私はどうしたって言わなければならぬ宿命なんです。

霊界の人達が鎮まらなければ、現界の人間の社会も治まらないんです。日本の政治が色んなことになっていくけれども、それは霊の世界における人達の心が鎮まっていけないんです。日本だけやない、世界中、そうなんです。

霊界の人達がよりどころとする部門が、宗教の世界になっております。けれどもその宗教がですねえ、派閥派閥、企業企業、金儲け金儲けで、信者を拡大して形を大きくしようというような、邪道的な宗教団体が多いんです。

これを何とか修正しなければいけない。それが、私のお役目です。

それに対して、今日は皆さん方にも協力してもらっていることになるんですよ。私は八時まで寝たんですが、十時半というような祭典のために、皆さんには朝の早うから仕度してもらい、足を運んでもらって、並大抵なことやないなと思っております。いつもは集まりやすいように昼の二時から人間中心に考えておるんやけれども、今日は午後からは直会演芸会で遊んでもらうようになってますのでね。

そんなことを思ったら、胸がつかまってくるんです。こうやってね、親しく皆さん方の前で話ができることは非常に嬉しい。

今日の日まで、何がために命があったのか。自分の宿命というものを、はつきり自分で解釈できて嬉しいんですが、それには私の生まれつきの肉体の条件もあるんですよ。

母親の話では、私が生まれて三日目位からおかしいと思つて、近所の子供を連れてきて二人並べて比べてみたそうです。二歳、三歳になると、は

つきり胸郭の骨が漏斗状に、終いには背中にくつづく位に凹んできた。——今は、マシです、大分出てきました。

県立の郡山中学（旧制）の入学試験では、それが心臓を圧迫して五年間の命はない、気楽に遊ばしてあげてくれと言われてね、ポンとはねられませんでした。そもそも悔しかったです。

ところが先生が奔走して探してくれて、一番最後に願書を受け付けてくれたのが布施の日新商業という私立学校です。死んでもかまわんからと親が言い、試験さえ通ればという条件で入れてもらった。お陰で、教育だけは付けてもらいました。

しかし、もし私が健康状態であつたら、違ったコースになつたかもしれん。今日の私はなかつたと思います。私は宗教や神さんは、もともと嫌いやからね。おそらく、こんな仕事はしていない。立正大学に入った時でも、考古学をやつたんです。唯物史観の世界や。石器時代の遺跡とかそんなのが好きやからね、そのまま考古学の世界に進んでいたかもしれません。

けれども途中で日本が戦争に負けたんで転向しましたから、一番嫌いなことを仕事としてせなならんというのは、宿命やな。

私の母親は神がかりでね、そのことは、話としてはもう三つ位の時から聞いてたんですよ。

私が生まれる時に、いわゆる人格神の神さん達が集まつて相談されたらしい。その時に、これからの世の先行きは戦争戦争だから、今度、この宿命をもつて生まれさす人間は、戦争に関係のない人間にしておかないといけない、と。そうすると手に印を付けてもあかんし、足に印があつても不自由だし、どこに付けようかというように、何を神議りされたと言っらんやね。

結論は、長年、世に出ないで苦しんだことが、

霊の世界の神さん達が一番の心の悩みなんだから、出来てくる子供は、胸に印を付けようということになつたらしい。

そんなことを、母親から聞いていたのですが、私が十七、八歳になると、本当に戦争ばかりの時代です。霊界では、世の中がこうなることが分かっていたのやな。

大学を卒業して二十四歳の時に、兵隊検査がありました。今言うたような体ですから兵役免除ですわ。戦争に行つていません。戦争に行けば、大学を出ていたら大尉将校になりますわね。私の性格やつたらおそらく、部下を戦死させておいて、自分だけ生きてはよう帰りません。

だから私が健康やつたら、この仕事は出来ていません。神さんには私の人生が分かつておつたんやと思います。私の特殊な肉体の構造が、自分の大きな宿命を助けてくれたんです。

そういうように病弱であるのに、年がいけばいくほど逆に達者になつて世の中の健康な人と変わらない、これが不思議なんです。霊界の人の仕事というのは計りしれないものがあるんです。これから何年命があるか分からんけれども、私のお役目が残っているだけは生かされるんでしょう。

## 皆さんへ「人生を楽しむ」

この年になつて手術も病氣も経験させてもらいました。大倭病院は作つたけれど、患者になつたことがなかつたので、患者の気持ちも味わわせてもらいました。現在、医療も高度に発展してきています。その進歩した色々な内容を、自分自身が肌身を感じました。非常にありがたいものです。

病氣を神さんに助けてもらえらるというのは、迷信ですよ。もし私が、神さんに守つてもらつてい

るといふ自惚れを持つているとしても、ちゃんと脳血栓にもなるし、皮膚病にもなつて、医者のお話になるんです。そういう現実をあなた達には知つてほしいんです。

だから神さんを拝んでたら無病息災でいける、病氣になつた時には神さんが助けてくれる、そんなことを考えてもらつたら困るんです。病氣になつたら早期発見やで（笑）。私は横着して十年放つておいて大げさなことになりました。

ところが、信仰したら幸せになる、神さんが助けてくれるという宗教が多いんやね。嘘ばっかり言うてます（笑）。こんなのは邪教なんです。

大倭へ来て拝んでおつたとしても、どこか悪くなつたら、ちゃんと医者へ行つて診てもらつて下さいね。神さんは治してくれませぬよ。（笑）

医学、医療も神さんからもらつて知恵なんです。大倭にも病院がありますから、宣伝とはちがうんですけど（笑）、病氣は早期に発見して、医者で治療してもらつても必要なんです。そうして、この世に生れた以上、一日でも長生きすることを考えましょう。

本當の宗教の世界の神さんは、拝んだら出てきて治してくれる神さんやない、鏡なんです。鏡を見て、神さんの心に添うような一日の生活のあり方をしてほしい。暑い時は暑いように、寒い時は寒いように、自然の摂理に従つていくというのが、神さんに対する信仰なんです。

だから、あんまり無理をせんように。というのもね、生活のためにやつぱり無理をしますよ。まあ、無理をして病氣になつた時はお医者さんに助けてもらうこと（笑）。信仰しているから医者にかかりませぬ、薬は飲みませぬという迷信はあかん。

皆さん、楽しい人生を送つてほしいです。



第286回 大倭会 秋の一泊文化行事報告  
平成17年10月30～31日

静かに迎えてくれた  
巫人達

\*日本海・丹波・丹後方面へ\*

あじさい畠 松本 毛ト

一日目の午前11時、元伊勢大神宮、又は外宮と呼ばれている豊受大神社とようけおほじんじやに到着。笑顔の宮司さん、紅色のさざんかが満開で、総勢48人を迎えて下さる。石段を登ると、本殿後方の杉と檜（表紙写真）が真っ先に目に飛び込む。この古木には高級霊がおられると、平成3年の文化行事でこの地を訪れた時、法主様がお話しなさったと聞き、立派さが更に増す。本殿前で声を合わせて、聖歌「くにもと」を唄い、「奈母太加天腹」を三唱する。出口三平さんが、「ここ大江町だけでなく、丹後一帯が豊受大神さまのお地場で、いわば比沼真奈井の地なのですね。峰山や天橋立の籠神社にも外宮伝承があり、豊受の神さんは丹後各地で祀られ、天照さんよりずっと古い神さんで、大倭の饒速日ニハヤヒさんとも深い関係の神さんなんですよ」と教えて下さったので、親しみを感じる。

けれど、豊受さんは伊勢に連れて行かれたのだから、ここにはおられないはず、等とも思う。

次の目的地、皇大神社は元伊勢大神宮又は内宮と呼ばれ、境内には79もの末社（全国の一の宮等だそう）がある。御祭神は、天照大神さん。宮司さんのお祓いを受け正式参拝の後、「くにもと」と「奈母太加天腹」でもお詣りをしてから、場所を移して宮司さんのお話を聞く。

気持ちの良い境内をぐるっと回る形で、ふもと

まで下りて行く途中、どこから見ても円錐形で、季節がもう少し進めば錦の衣を着飾るという一願さんが見えた。このお山の神さんは一つの願いだけをお聞きになるといって、それで一願さん。紅葉はとどこどころであったが、それでもその姿の美しいこと変わり様もなく見惚れてしまう。

午後2時、天橋立到着。地図で見ると、この付近一帯も、真奈井なのである。時間の都合で、股のぞきで有名な傘松公園までは行かなかつたが、それでも昼食後、天橋立を散策できて、良かった。私としては訪れた神社でお詣りして、神さんと思う時間を持てたこと、それが何か一番良かったなど、そんな風に思っております。

あじさい畠 杉本 順一

出発前に奥津城の法主さんに挨拶に行くこと「ウツシヨノミナヲ タヨリニシテイル」との事。顕幽不二の教えを考えればこの言葉は納得できた。天気も良く楽しみな二日間になりそうである。

二十日ほど前、幹事役である湯浅芳郎さんからいただいた今回の旅行予定表を見ていたら、共に行く予定の次女が頭痛をおこす。予定表にある二ヶ所の神社に関係のある龍神さんがこられて、大倭の水を持ってきてほしいとの事だった。持参の約束をすればそれで終わった。

約束通り金剛大龍王にお供えしておいたお水を持ってバスに乗り込むと、既に小学生の遠足並に賑やかで、91歳の青山日元さんも参加された。

豊受大神社には、出口三平さん、久後生歩さん、藤本宏秋 早苗 天音（3歳） 翔大（1歳）一家が待っていてくれた。

本殿に持参の水をお供えして挨拶した。参拝のあと境内をぐるりひと回りした。屋根を覆うようにして育っている大木の枝が本殿を守る為に残



に切り落とされていたのが痛々しかった。人は何に向かつて挨拶しているのか、その事を考えさせられた一コマであった。

次に皇大神社をお訪ねした（表紙）。神社に祀られてあると言う人格霊に感応は無く、古代からこの地で神祭りをされていた人たちのさわやかな気を感じていた。

宮司さんの山や木々に対する深い思いを聞かせてもらい、いいひと時を過ごしました。境内を離れ禁足地である日室岳（一願さん、表紙）を拝しお山の龍神さんに大倭の水をお供えした。境内ではしゃぎ回る子供達の声が実に心地よかったです。ここから昼食予定の天橋立に向かった。

昼食後ここで六人の方とお別れした。

しばらく自由時間があつたので、大きな船が通る時だけ橋を通行止めにする回転橋に行った。私が中学 高校のとき夏休みの全校水泳合宿でお世話になった旅館の傍である。

この後バスは湯村温泉をめざした。途中余部鉄橋の下を通る。この鉄橋は昭和61年12月28日、強風のため機関車と客車七両が落下し、下にあった加工場の従業員五人と客車内の食堂従業員一人の

犠牲者がでた所である。バスが事故現場を通過した時には、何人かの人が体調に変化を起こしていたようだった。車内でそれぞれが供養の心をもたれたようである。

夕暮れ近く空が急に曇り始めたのが、バスの中からでもよく分かった。暗闇の空は稲光と大雨であった。日室岳の龍神さんの閃光と雨による挨拶と気付いて、そのタイムミングに驚き感謝した。

旅館の朝野家さんに着くと、雨は止んでいた。さあ夜の大宴会が始まった。宴もたけなわ、大倭会宴会部長の水野さんが舞台上に立つと演芸タイムとなる。

青山日元さんの名調子、声の力は相変わらず。中西会長夫妻、李さんはそれぞれに喉自慢。今年も名張市から且田・平山両人が一年のマジック練習の成果見せてくれました。堺市の原 杉立・真田さんそして邑の松本さん等の、引越しのサカイをもじった「原劇団のサカイ」変装シリーズ(写真)。杉本一家HGフオー。昇ちゃんと岸野さんのカヌー漕ぎ。トリは「湯浅劇団」の島娘の踊りとなった(写真)。何れ劣らぬ面々の迷?演技。笑いつづけるのも疲れるものと分かった。宴会終了後、部屋に來られた人たちと十二時頃まで話して寝た。

朝食中にかつて安宿苑職員だった済木宏司さんがおいでになった。突然のことで驚いた。舞鶴の藤本さん一家と四日市市の中村勝彦さんとは旅館でお別れした。

9時、バスは出発。浜坂で海産物の買い物。次に最後の訪問地、そばで名高い出石に到着。雨の中、応仁の乱・西軍の大將山名宗全の居城などを散策する人も多くいた。

帰りのバスは快調に大倭へ、天気はどんどん良くなってきた。休憩地の青物市場で主婦たちは晩

御飯の用意を考えて、目を輝かした。  
お蔭様で事故無く明るいうちに邑に帰る事が出来ました。

### 京都府綾部市 出口 三平

丹後での大倭会文化行事、今回は部分的参加でしたが、十四年前、矢追法主ご健在のときにも参加させてもらい、懐かしい思い出も甦りました。大倭と丹波の神々とは、深く繋がっているのでは……と、私なりに感じていました。

丹波綾部の大本も、丹波の神々と深く関わって生まれました。明治二五年に、初老の寡婦 出口直に、隠退させられていた親神が神懸りし、悪化しきつた世界の「立替え直直し」や「世界改造」を叫ぶわけで、体制側にすれば目障りな存在だったのでしょう、二度も手ひどい弾圧を受けましたが、そんな神さまが、丹波には昔からおられたようです。

今回最初の訪問地 大江の外宮で、仲良しのモトさんと神さま話をしていたら、ちゃんと書けというところか、本紙に書く羽目になりましたが、紙数がないのをいいことに、枝葉や考証なしで、そんな丹波の「ニギハヤヒ」と「豊受大神」さまへの思いを、少し書かせてもらいます。

大本は若狭湾上の無人島 冠島杵島に封じられていた親神さまのご神霊を迎えることから、その活動が始まっています。出口直はそんな島があることも知らなかったのです。しかし若狭湾周辺一帯では昔から崇められてきた神の島で、丹後一の宮の籠神社には、その島こそ、ニギハヤヒの降臨隠退の島であったとの伝承が残っていたのです。

ニギハヤヒは、天孫 二ニギの降臨に先立ち天降った神さまで、矢追法主は、大倭をその降誕の聖地とされていることは、いうまでもありません

が、古代では先進地 丹波にまず降臨し、大和へと進出したスメラであったようです。

ニギハヤヒや丹波王国は消されてゆきますが、靈魂は消えるものでもなく、大本もその因縁の島から始まり、ニギハヤヒの流れの大倭も奈良に出現し、清新な靈性の世界が開かれたのも、古代丹波にゆかりある神々の活動があったのではと思うのです。

いまひとつの、まだ真実が隠された神が、ニギハヤヒの本源ともいえる豊受大神です。

大和に入った新たな勢力にいたたまれなくなつたのでしょうか、アマテラス(のちの伊勢内宮の神)が最初に頼られ引越されたのが豊受大神(のちの伊勢外宮の神)のいる丹波でした。

丹波には、複数の元外宮といわれる神社がありますが、丹波全域が豊受信仰で、元外宮だともいえそうです。

豊受神は、アマテラス以上の神格を持つ本源のないのちの神さまで、頼りがいもあつたのでしよう、アマテラスは丹波の地で四年間過ごされ、転々として最終的に伊勢に鎮座されますが、豊受大神が忘れられず、伊勢の地に招かれるわけです。

出口家は、丹波の主神 豊受大神を祭祀する家だつたらしく、外宮神道の世界では、出口姓の神官の名が歴史に残っています。

王仁三郎も籠神社の先代宮司も、アマテラスの御饌津神(台所神)とされた豊受神ではなく、本来のいのちの親神としてのご神格を出そうと苦心しますが、アマテラス絶対の時代でしたから、苦労されたようです。

どこかで歪んでしまった日本の靈性を、もとの「やまとだましい」に戻してゆく、そんな大本や大倭の神々の思いを、今回も感じていました。

## 風ぐるま

戦争が終わって  
鹿児島刑務所体験記

奈良市藤ノ木台 清川雅蔵

昭和二十一年、辰春丸事件(※)のため上陸と同時に八十名が進駐軍の用意したトラックに乗せられ、着いたのは城山の石造りの刑務所、軍服を脱いで青い着物に着替えさせられノーパンで組類は全部無く、独房の未決監に入れられました。

※日本への復員の船中で、マリアの戦友のために水を盗んだ元兵士を元将校が殴ったのに反発して騒乱事件に発展、それが共産思想と見られた。(平成15年11月号『とおやまと』

での清川雅蔵さんの文より)

生まれて初めての経験で驚きばかりでした。独房の入口は鉄の扉の下の方に四角い窓があり飯の出し入れ口であった。部屋の中は四畳位の板の間で隅に開き放しの便器、窓は鉄格子。寝そべってはいけない、あぐらか正座。

当時は戦前の規則や風習を適用して非民主的、大変厳しく人間扱いしていない状態でした。押し型のような丸い十センチ程度の麦飯と塩気のない雑草のような汁の食事で、三、四日経つと歩くのに足がふらつき、しばらくすると手の甲はカサカサになりました。三日に一回、中庭を歩行練習。一週間に一回の入浴、それも皮膚病予防のため硫黄の入った細長い湯船に約一分間、豆腐屋の鈴のような合図で次の水の湯船に約一分間、とにかく浸かるだけで石鹸で洗うことがない。その入浴場に行く途中には、竹細工、縫製、理髪、木工、大工、鉄工等、色々の仕事を、赤茶色の着物を着た罪の決まった者達がして、阿部譲二の小説

『塀の中の懲りない面々』と変わらない。

一、二カ月しても何の音沙汰もなく、その内、本当の罪人が多くなり独房が足りなくなつて、私の部屋に野菜泥棒、前科三犯強盗強姦罪、前科五犯強姦殺人罪……一人増え二人増え、最高五人までになりました。しかし軍隊と同じで、新しい罪人は新兵と同じという仁義は徹底していました。前科五犯の者が、最初から独房に入っていた私に仁義を切り、仁義を守る。ビルマのミンガランドン時代の軍隊生活を連想したものでした。

三カ月経つても音沙汰なし。私個人は罪の意識がなく、今度刑務所を出たら煙草を二本同時に吸いたい思いで一杯でありました。許される読書は仏教的な本のみ。毎日毎日、日蓮、法然、親鸞と仏教の本を貪り読んだものでした。

四力月目によくやく鹿児島地方裁判所に、編み笠をかぶつて手錠をはめられて出廷しましたが、八十名の内七十五名が起訴猶予で帰って行きました。残り五名のうちに、私は運悪く入りました。何のために日本に帰国したか解らない。刑務所に入るために帰つて来たものと考えれば余りにも情けなく、死ぬにしても種類は何一つなく、ただただ我慢と、毎日一冊ずつ交換される仏教の本を心待ちにする日が続ききました。

そして四力月目の後半、やつと夜中の十二時か一時頃、鉄の扉を叩く監視人が来て出獄を許されました。刑務所の石の門を出ると同時に、念願の煙草二本を吸い、目がくらんで倒れる始末でした。外は午前二時か三時というのにアセチレンガスの灯りで、ヤミ市の露店が立ち並びごつたがえしいました。そのヤミ市で大豆の塩煮とにぎり飯を手づかみで口に頬張つてむさぼるようにして食べました。この美味しかった味は一生忘れることはできません。

あたり一面焼け野原で水道管は破裂して、山形屋デパートが半壊して残っていました。刑務所に入る前に辰春丸の中でカミソリで坊主にしていましたが、刑務所を出る時は昔の三高の学生のように頭髪はぼろぼろ、髭はばさばさで、ヤミ市での姿は敗残兵そのものであったと思われまふ。帰郷のための列車の中で腹痛下痢に悩まされ、鹿児島の上川内駅で途中下車し医院に飛び込みましたが、運悪くその医者は軍隊嫌い診察してくれませんでした。その内、どうやら下痢もおさまってきたのです。

その途中、他の中隊だが起訴猶予で先に帰宅した七十五名の一人、高倉至氏の自宅を訪問するため、甘木駅より福岡県朝倉郡に向かいました。貨車の列車の中で気分が悪くなり、親切な人に助けられて、一夜の宿を共にしました。その方が偶然にも高倉至氏のうすい親戚に当たり、地方の旧家で、小学校の先生でありました。久しぶりのご馳走に酒をくみかわし、事の成り行きを話す内に、涙にくれた一夜でした。

翌朝、戦友の高倉氏宅に赴きましたが、山また山の中で、真っ白いソバの花が一面に咲き誇つて私を迎えてくれました。しかし、戦友の父親は既に亡くなり、母親は失明の状態で、世の無情さにこれまた涙にくれました。

後日、高倉先生から頂いた温情のこもった便りに、俳句がしたためられてありました。

復員のこよいは山家秋茄子  
事情聞き涙に濡れし庭の萩

最後に、裁判での沼田隊長、戦友達の尽力、心遣い、神仏の加護に感謝して、今は、高齢社会に立ち向かい耐えていく心づもりです。



# AWTC日誌

11月11日 教務本庁のトイレ排水管が木の根で詰まり修理。  
 11月13日 第17回大倭会文化講演会で、現在NHK「ぐるっ」と関西おひるまえーに出演中の亀山房代さんをお招きし、『これ



が私の生きる道』というテーマで笑いあり真摯さありのお話をして頂き大盛況となりました。「人には、笑いたいたい、笑たろか」という要求があり、いつの世でも笑いには必要とされている。お笑いという仕事は、お客さんに笑って頂く、お金を出してウサを晴らしてもらうもの、吉本興業の事、漫才という芸の厳しさ、先輩女性芸人の泪、舞台の味を語られました。  
 また戦争や革命の写真を撮り続ける写真家の夫（土門拳賞をとったことのある今枝弘一さん）との結婚とドラマチックな出産話、漫才コンビの解消で漫才師という明確な「帰る場所」を失ってタレントとしての再出

## 新年のご挨拶を申し上げます

昨年、一昨年と地震、台風、大雨は随分厳しいものがありました。

自然（加美）の気の動き、気の変化にたいして、人間が出来る事はほんのわずかな事だと、改めて思い知りました。  
 「こんな時どんな心構えでいけばいいのか。  
 「さからわず、なすがままなる 雪景色」と言われた法主さんの心に学びたいと思えました。  
 人と人の関係も、又同じ事かと……。

大倭六十二年 元旦

おおやまとあしひらむら  
 大倭紫陽花邑

代表

矢追 家麻呂

邑人一同

発、家族が出来た事によって、吉本での常識と普段の生活での色んな立場の人との関わりの方を知った事等のお話に、皆は「あー、おもしろかった」と感想を言っていました。(一章)  
 11月14日 夕方、北海道小樽市の守谷明宏さん来邑。  
 11月15日 大倭神宮月次祭。  
 東京の矢部后代さん来邑。  
 11月19日 20日 群馬県安中市の桜井節子 誓子母娘が来邑。  
 11月18日 夜、交流の家でF I WC 定例委員会。  
 11月20日 杉本順一さん等11人が京都の建礼門院徳子さんの陵と救光院と近江国篠原（現滋賀県野洲町）にある平宗盛 清宗父子のお墓を訪ねました。

ました。  
 4時より大倭会幹事会。  
 11月26日 第12回備中神楽が大倭神楽の振舞酒は升をもて、有山八洲彦（あぢさゝる句会より）  
 11月29日 午後2時から大倭病院の中間決算報告会議。  
 11月30日 奈良県生駒郡の村上弘志さんが「紫陽花邑のことを知りたい」とのこと来邑。  
 12月2日 杉本順一さん等6人が法隆寺の北、岡原にある山背大兄王（聖徳太子の長子）のお墓を訪ねました。  
 夜、大倭グループで働く中堅層を中心に初めての交流懇親会を「かごの屋」で行いました。  
 急な呼びかけであったにも関わらず参加者は16名。会も盛り上がり「遊人会」と名づけ今後もレクリエーションを計画していく事になりました。  
 12月4日 午後2時より大倭神宮で金鶏祭が行われました。  
 12月6日 大倭神宮月次祭。  
 夜、大倭会館で邑倭会。



## 大倭安宿苑では

11月16日 合同防災訓練の一環としてビデオ視聴をしました。  
 (菅原園)  
 11月7日 8日 最重度グループが大坂 神戸方面へ宿泊旅行。  
 (須加宮寮)  
 11月27日 家族交流会を行いました。  
 (長曾根寮)  
 11月14日 インフルエンザ予防接種を行いました。  
 (八重垣園)  
 12月1日 開設10周年のお祝いをしました。

## ATMIC

\* 年始祭（大倭神宮）  
 1月1日（祝） 午後一時から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶。  
 午後2時から大倭神宮にて。  
 \* 月次祭（大倭神宮）  
 1月6日（金） 午後2時より大倭神宮にて。  
 \* 大倭会主催第四四六回例会  
 1月8日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
 \* 大とんど  
 1月9日（成人の日） 午前10時より大本宮西の斎庭にて。  
 \* 月次祭（大倭神宮）  
 1月15日（日） 午後2時より大倭神宮にて。  
 \* 月次祭（大本宮）  
 1月23日（月） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。